

『もりおかの短歌』春の部

一般部門 優秀賞十首

ありあけ つき ひかり
有明の月の光に

ゆめ
夢さめて

みこだ いち
ふらり出かける神子田の市に

盛岡市 赤坂 昌信

たかまつ はなめ きみ
高松で花愛ず君に

そ くるまいすお
より添いて車椅子押す

こみち
うららの小路

青森県弘前市 木村 千尋

こずかた しろあと た
不来方の城跡に立ちて

はな よ
花に酔ふ

こと かぜふ
ひとときなれど古都の風吹く

宮城県仙台市 木村 智佑

檀ヶ森の丘に
だんがもり おか

広ごるりんご園
ひろ えん

花ほころびて小鳥さえずる
はな ことり

盛岡市 小林 貴史

幼き日
おきな ひ

祖父と歩きし北上の
そふ ある きたかみ

川辺を今日は我が子と歩く
かわべ きょう わ こ ある

宮城県登米市 佐藤 礼佳

柔らかき言葉に飢えて
やわ ことば う

盛岡の友の声聞く
もりおか とも こえき

久方振りに
ひさかた ぶ

青森県青森市 鈴木 操

盛岡の古い町家を
もりおか ふる まちや

訪ねれば
たず

格子戸の奥にお雛さま見ゆ
こうしど おく ひな み

盛岡市 西川 政勝

ふるさとの山と友に迎えられ
まご ひ て
孫を引く手に
はなふ ち
花吹ぶき散る

東京都東村山市 廣瀬 典子

陸と海おすびし長き塩の道
りく うみ なが しお みち
南部牛追い
なんぶうしお
唄に残れり
うた のこ

盛岡市 堀米 公子

遠景の残雪の山川に映え
えんけい ざんせつ やまかわ は
橋のたもとで
はし
暫し佇む
しば たたず

茨城県日立市 飛田 秀幸

令和元年春の部

ジュニア部門 優秀賞三首

該当なし

【講評】

啄木の里、盛岡で短歌を投稿してくださることに感激します。季節が冬から春に移るとき、人は何を思うでしょうか。今回も多くのか作が集まり、選歌に悩みました。盛岡の魅力にあらためて気が付かされました。

令和元年 六月選

投稿数 百九首

選者 赤澤 篤司 氏

『もりおかの短歌』春の部

〈一般部門〉優秀賞十首

ふるさとの

山を眺めて詩を詠む

哀しき時も嬉しき時も

盛岡市 赤坂 昌信

知事さんの

春のマスクは菌寄せず

南部型染め伝統の柄

盛岡市 堀米 公子

波の瀬に

大森浜の啄木は

憂いをさそう、里を恋いてか

北海道北斗市 有賀 久雄

ひとびと

人々の

おもあ

思いを浴びて うるまへと

ゆき いま もりおか はる

雪から今は 盛岡も春

沖縄県うるま市 前徳 薫

おだ はる もりおか

穏やかな春の盛岡

ふくつ えいき もら

不屈なる英気を貫う

いしわ さくら

石割り桜

盛岡市 河野 康夫

ふっこう

復興の

さんてつとつぶう なかはし

三鉄突風の中走る

たいりょうばた むか ひとびと

大漁旗で向える人々

盛岡市 関 容子

かんせんしや ふるさとほこ

感染者ゼロの古里誇りつつ

しきょう ねんわ

思郷の念湧く

いち きじ

よ市の記事に

青森県青森市 鈴木 操

ふきのとう

あさひ て はるつ

朝日に照らされ春告げる

しゅん さが み こだあさいち

旬を探しに神子田朝市

埼玉県さいたま市 片山 奈桜子

いつまでも

き じふじゅうろ

消えるはずのない恋心

いわてさん わ

岩手山でも分かるはず

高橋 凜

君の活きし

きみ い まち すがた み

街の姿は見えねども

なかつ なみ いき とも

中津の水音に呼吸を共にす

兵庫県丹波市 大野 節子

令和2年春の部

春の部へジュニア部門へ 優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

今の季節、もろ手を挙げて春を謳歌している…はずだった。感染者が無い盛岡でも感染拡大防止のために県外との往来も遠慮がちになり、今年はひっそりと「ふきのとう」のような思いで過ごしている。そのような中、詠み人たちは故郷の自然や魅力を部屋の窓から見つめ、あるいは思いを馳せながら、噛みしめているのだろう。盛岡人らしさとともに、今の時代を生き抜いてゆく逞しさに愛しさを感じながら、私はこの十首を選んだ。

令和二年六月選 春の部

投稿数 七十五首

選者 山本 玲子

『もりおかの短歌』春の部

〈一般部門〉優秀賞十首

おさな ひまつ だいこ ね な
幼き日祭り太鼓の音に泣きし

はは せなか
母の背中の

ぬく こい
温み恋しき

奥州市 沼倉 規子

ざんせつ かわ あそ わ かげ
残雪の川に遊びし我が影は
とけてはむすぶ

うたかたの夢 ゆめ

北海道函館市 古屋 創大

ふるさと はな ち まな こ
故郷を離れこの地に学ぶ子を

いだ まも
抱き守れよ

もりおかの空 そら

愛知県一宮市 五十嵐 理子

わしがた み おやま はげ
鷲形の見ゆる御山に励まされ

きぼう うた
「希望」歌ひて

ゆめ たねえ
夢の種選る

青森県青森市 鈴木 操

いしわ さくら はな さ ごと
石割って桜の花が咲く如く

かくご き
覚悟を決めて

ち い
この地に生きる

盛岡市 河野 康夫

いつ ゆ ほんや
何時も行く本屋のレジに

み かお た
見たことのなき顔が立つ

はる ゆふづきよ
春の夕月夜

盛岡市 立石 昂

さつぼろ がくせいじだいおも だ
札幌の学生時代思い出す

もりおか さ
盛岡に咲く

かお
リラの香りに

盛岡市 鈴木 充

てんぼうさん
天峰山から

はる すその みお
春の裾野を見下ろして

わかものたち
若者達のパラグライダー飛ぶ

盛岡市 小林 貴史

「ウイルスを運ばぬように」

うつむ ちやくにん はる
俯きて着任の春に

きよ やま
清き山あり

盛岡市 郷家 美磨

はた お
機を織る

やよいさんがつ
弥生三月もりおかの

しこんさきおり や じまん
紫紺裂織わが家の自慢

盛岡市 赤坂 昌信

令和3年春の部

春の部へジュニア部門へ優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

『もりおかの短歌』に関わるようになってかれこれ十年。この間に東日本大震災があり、盛岡を訪れる修学旅行生や観光旅行者が激減しました。震災の復興が徐々に進むなか今度は新型コロナウイルスの世界的な流行です。ウイルス禍の日々、行動は制限され籠りがちの暮らしと思われますが、意外にも前向きな人々の生活が詠われていて、鑑賞しながら心強くなりました。

令三年六月選 春の部

投稿数 六十一首

選者 松田 久恵

『もりおかの短歌』春の部

〈一般部門〉優秀賞十首

なかつがわきよ　なが
中津川淨き流れに草萌える

かぜさわ
風爽やかに

すが　こころ
清しき心

盛岡市　餘目　忠吉

くも　わ　はちまんたい
雲が湧き八幡平に

りゆう　く
龍が来る

ドラゴンアイのブルー謎めく

盛岡市　赤坂　昌信

たくぼく　ひとめあ　しぶたみ
啄木に一目会ひたく渋民へ

みそひともし
三十一文字に

おも
思ひをのせて

奥州市　小野寺　洋一

としょしつ
図書室の

まど した いわてさん
窓に親しき岩手山

いちれい たびだ あした
一礼をして旅立つ朝

秋田県大仙市 鈴木 仁

かいぎよう はんせい きよ ぎようせき
開業より半世紀余の業績を

お と
惜しみて閉づる

いわやま
岩山パーク

青森県青森市 鈴木 操

こころあづ きみ く ま
わが心預けし君の来るを待つ

なたねづ ゆふ
菜種梅雨降る

かいうんばし
開運橋にて

青森県青森市 鈴木 操

しろあと
もりおかの城跡

はる
やつと春めいて

さんしゆゆ き いしがき は
山茱萸の黄の石垣に映ゆ

盛岡市 鈴木 充

ゆきがた わし
雪形の鷺がくつきり浮き上がり
きょう はたけ
今日は畑に
せっかい ま
石灰を撒く

盛岡市 中島 久光

たかまつ いけ きしべ はないかだ
高松の池の岸辺の花筏
えさ もと
餌を求める
とり けち
鳥が蹴散らす

盛岡市 中島 久光

いしわ さくらさ ころゆめ
石割りの桜咲く頃夢うつつ
おに てがた
鬼の手形の
いわ
岩もやわらか

盛岡市 堀米 公子

令和4年春の部

春の部へジュニア部門へ優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

「もりおかの短歌」が始まったのは平成二十年の夏の部からで、今年で十五年目になる。これだけ長い間に多くの歌が詠まれてきたが、同じものはひとつもない。岩手山や啄木など素材は同じであっても、それぞれに込められた思いに違いがあるからである。これからも、素材は同じであったとしても、それをどう自分に引き付けて詠むかに心掛けて作って欲しい。又、推敲することを大切にしてもらいたい。

令和四年六月選 春の部

投稿数 八十八首

選者 山本 豊

『もりおかの短歌』春の部

〈一般部門〉優秀賞十首

草萌えて

くさも

春の匂える中津川

はるにお なかつがわ

軽ろき水音にしばし佇む

か みおと たたず

盛岡市 餘目 忠吉

不来方の城址に立ちて

こずかた じょうし た

願いしは比翼連理の

ねが ひよくれんり

旅の続くを

たび つづ

愛知県犬山市 林 進

盛岡の菜園通り

もりおか さいえんどお

街路樹の小豆梨散り

がいろじゅ あずきなしち

舗道を埋む

ほどう うづ

盛岡市 鈴木 充

はる ひ かわも
春の日に川面きらめく

さけ なかつ がわべ
鮭のぼる中津川辺に

ちぎよはな こ
稚魚放つ児ら

花巻市 安部 勝衛

やまがみ ひろ りょうて まも
山神の広き両手に守られて

こ ずかた の
不来方の野に

はる かぜ
春の風ふく

東京都品川区 増田 裕美

はつなつ ひかり
初夏の光のなかに

たくぼく かひ
啄木の歌碑ふるさとの

やま せ た
山を背に立つ

奥州市 遠藤 カオル

とち はなほどう さいばんしよ
栃の花歩道につもる裁判所

いしわりぎくら
石割桜に

わかば
若葉かがやく

千葉県浦安市 岩田 一

なたやちよう
鉦屋町

しにせまちや じようちよあり
老舗町屋に情緒有り

れきし かた あきな みち
歴史が語る商いの道

盛岡市 三澤 信裕

ふるさとの

おに てがた と かこ
鬼の手形を取り囲み

なが こ ひとみ
眺める子らは瞳をこらす

盛岡市 赤坂 昌信

ゆきがこ と
雪囲ひ解くと

きぼう め だ
希望の芽を抱きし

いしわりぎくら えだえだはづ
石割桜の枝々弾む

青森市 鈴木 操

令和5年春の部

春の部〈ジュニア部門〉 優秀賞

かりかりのせんべいをたべ

しよくにん わざ でんとう
職人の技と伝統

おも だ
また思い出す

京都市伏見区 松岡 雪華(十四歳)

【講評】

一般部門・ジュニア部門

選歌をしていると盛岡の街は歌の素材が多いと感じた。ニューヨークタイムズで世界の行くべきところの第二位に選ばれた。それが影響しただろうか。多くの外国人観光客が目についた。ボラントイアのガイドさんたちは忙しい日々を過ごしているだろう。短歌は三十一音の抒情詩である。短時間で作ることができる利点もあるが、思いをどう伝えるか。美しい言葉で作っただけでは詩にならない。何を見るかが大切である。真実が見えれば、優れた作品となる。何度でも挑戦してほしい。

令和五年六月選 春の部

投稿数 百十二首

選者 赤澤 篤司